

## これまでの保育を振り返って

齊藤雅子  
(幼稚園教諭)

私が幼稚園教諭として仕事を始めてから、今年度で九年目となりました。幼いころからの夢をかこなえていけません。喜びと共に日々勉強の毎日を過ごしています。今回、このような「私の保育ノート」への執筆の機会を頂き、改めて自分自身の保育を見直してみたいと思います。

## 一年目を振り返って

一年目、念願の幼稚園教諭になることができ、子どもたちが笑顔で「先生」と呼んでくれることがうれしい毎日でした。しかし、それと同時に、「先生」ということの意味をさまざまな面で感じる一年でも

ありました。

一年目は、先輩の先生と二人で年少組の担任となりましたが、それまで子どもたちとかわるといえば、学生の時の保育実習ぐらいだったので、子どもたちに「どう声を掛けたらよいのか」「どう接したらよいのか」がわからず、言葉掛けの一つ一つに悩んでいました。また、クラスでの活動で私がリーダーとなり保育活動を進めようとしても、子どもたちとうまく活動内容を伝えられない、まとまらない、ということが多く、一学期が終わるころには、できない自分が悔しく、涙を流す毎日でした。一緒に担任をしていた先輩の先生の言葉の掛け方、保育の進

め方を必死に観察し、遊びの場面では、他の先生と子どもたちのやりとりにも耳を傾け、どうにか自分のものにしようと必死だったことが思い出されま  
す。喜びと共に悩みの尽きない毎日を、先輩の先生  
方のお力を借りることで乗り越えられ、あきらめず  
に「先生」という仕事を続けられたと思います。

## 障がいのある子の一年

二年目に入り、私はクラス担任としてではなく、  
フリーの立場となり、さまざまなクラスへ補助とし  
て入ることになりました。その一年で障がいのある  
子とかわかることになり、私にとっては一年目に続  
き、「初めて」の経験ばかりでした。

年長児だったその子は「アスペルガー症候群」を  
持つ子で、障がいの理解から始まり、その子とのか  
わり方や、クラス活動にスムーズに加わることが  
できるようにと、担任の先生と相談し合ったり、試  
行錯誤の日々でした。一対一でのかかわりも多く、

気持ちを言葉でうまく表現できないその子に対し  
て、どう接していいかわからず、時には強い口調で  
指導してしまうこともありました。気持ちに余裕を  
持たずにいることを反省しながら、その子と同じ目  
線に立つことをまず第一に考えました。その子の気  
持ちをくみ取ること、それを代弁しながら次の活動  
に興味を持つってもらうこと、どのような言葉を掛け  
るのがよいのか……など、一つ一つが勉強でした。  
その子との出会いがあったからこそ、「子ども一人  
ひとりをしつかり見つめ、その子に合わせた保育」  
の大切さを実感することができました。

## 初めて一人でクラスを持つ

四年目、初めて一人でのクラス担任となり、期待  
と不安の中でスタートしました。今まで自分が学ん  
だことを生かし、「こんな保育がしたい」「こんなク  
ラスにしたい」と張り切っていたことを覚えていま  
す。それと同時に不安も大きかったのですが、それ

を子どもたちや保護者の方に見せてはいけない、と気を張りつめていました。初めて一人で担任をするということ、日々の保育がうまくいかなかったり、保護者の方とのかかわり方に悩んだり、悩みの尽きない中でも励みになったのは、やはり子どもたちの存在でした。一日の終わりに、「今日も楽しかったー」「先生、面白かったね」と笑顔で応えてくれる子どもたちがいたからこそ、その一年を無事に終えることができたと思います。

その一年で、私には忘れられない出来事がありました。年長児を受け持っていたため、最後の大きな舞台「卒園式」を終えると、ある保護者の方から、「先生、初めての担任で不安でしたよね。でもうちの先生、初めてが大好きで、この一年間、一度も、行きたくないと言うことはなかったですよ」と声を掛けていただきました。それまでにもうれしいこと、楽しいことはいっぱいありましたが、その言葉のおかげで、一年間張りつめていたものがすべてなくなり、「幼稚園に行きたくないと言うことはなかった」と

いう言葉をうれしく感じ、そして、その言葉の重要さも感じた出来事でした。また、「幼稚園って楽しいな！ 毎日行きたい！」と子どもたちみんなに思ってもらえるように、今後も頑張っていこう、と改めて決意する出来事でもありました。

### 初心を思い出す一年

今年度に入り、まだまだ未熟な私ですが、新任の先生と一緒にクラスを担任することになりました。私も緊張しながらのスタートでしたが、新任の先生はもつと緊張したスタートだったと思います。私も一年目を思い出し、互いに相談し合いながらの毎日ですが、新任の先生と一緒に過ごしていく中で、保育における大切なことを忘れていたと感じることが多くあります。一人ひとりときちんと向き合おうとする姿勢、この仕事に就きたいと思った原点など、私自身も一年目に持っていた思いを再び思い出しながら過ごす毎日です。今年度は、私自身も新任の先生と同じく、初心に帰り、子どもたち一人ひとりと

深くかかわり、楽しく過ごしていきたいと思っ  
ます。

私が「先生」として子どもたちと接していく中で、一番大切にしていることがあります。もちろん大切なことはたくさんあると思いますが、私は「言葉掛け」を最も大切にし、接してきました。「先生」は子どもたちにとって、手本でもあり、子どもたちの生活そのものにかかわる存在だと思います。そのため、子どもたち一人ひとりの性格や思い、感情をしつかりと受けとめ、その子に合わせた言葉掛けが必ずやだと思ひ、日々接しています。

「子どもが笑顔になれる言葉掛け」を目標に、これからも勉強していきたいと思ひます。

最後に……私は学生のころから地元の岩手県を離れ、青森県で今現在、仕事をしています。本園の職員の皆さんに支えられてきた九年間だったと思ひ

ます。知り合いもない中、「先生」としてスタートしましたが、先輩の先生方には、お母さん・お姉さんのような存在として何でも相談できる安心感があり、後輩の先生とは、妹・弟のような存在で、意見交換しながら共に学んでいこうという関係を築いていけることなど、園全体が温かい家族のようであることに感謝しています。

今までに出会い、たくさん笑顔と喜びをくれた子どもたちに「ありがとう」の思いを込めて、またこれから出会う子どもたちとの楽しい出来事に胸を弾ませ、笑顔あふれる日々となるよう、今後も励んでいきたいと思ひます。